



俳句雑誌[おき]

7月号

沖 発行所

# 逆さ地図

能村 研三

芒種

まくなぎに力と違ふ闘志かな

風に馴れ天辺咲きの朴一花

立ち酒が立ち飲みとなり西日落つ

館山・赤山地下壕跡他七句

地下壕に音なき音や梅雨兆す

先師登四郎の句集に『芒種』がある。生前に刊行した句集としては最後のものだが、あとがきには『芒種』とは二十四気の一つで六月六日のこと、「のぎ」のある穀物を播く時期という事で何となく好きなことばなのでつけた」とある。しかし、小題に「芒種」とあるものの、句集には「芒種」を季語とする句は一句もなかった。最後の句集「羽化」には、**芒種とふころに播かむ種子もかな**という句があった。

さらに、第九句集『寒九』には、**生きの身の微衰の中の芒種かな**という句がある。

いずれにせよ「芒種」や「白露」「雨水」などの二十四節気を使った句は、若い頃の句にはなく晩年になって多く使われるようになったようだ。

ところで、何年か前に気象協会が「日本版二十四節気」を作成すると発表し、現代日本の気候風土や慣習になじんだ言葉を広く募集した。と

地下壕の吊し電球涼しかり

密密と安房の竹叢南風ぐもり

お涅槃を螺旋三回り薄暑かな

朝風や沖島鷹島離れ浮く

朝ぐもり鱚生簀の影青く

麦笛や安房を突き出す逆さ地図

ころが二十四節気を軸に句を詠む俳人たちからは「言葉の意味が変わってしまつたら季節の定義そのものが変わってしまう」と、反対意見が続出。気象協会側にとっては、二十四節気が現在の日本の気象と多少ズレがあるにせよ、そのズレも含めて日本人の季節感の大きな指針となつてゐるということであつた。

たしかに立秋は八月七日頃では猛暑の最中であり、秋の始まりとは思えないが、「秋の兆しを感じる」「先駆けて秋を思う」という心の在り方こそが長い時間をかけて育まれた日本古来の季節感でもあるように思う。二十四節気は、今も伝統的な行事や季節の節目として、また農耕の目安になっているが、人が生きていく目安にもなつてゐるようだ。

# 蒼茫集



すぼんと

千田 百里

憲法記念日をちこちに雀群れ  
エレベーターの下り身の浮く薄暑かな  
聖五月生れ日入りの卵買ふ  
蜃気楼現れてタンカー金縛り  
渡御来るやカメラを縦に横に向け  
初鯉すぼんと海を脱いで来し

音なき雨

武藤 嘉子

春耕の土より息吹もらひけり  
せせらぎは光りつつ春奏でつつ  
惜春や生き来し八十路うべなひつ  
地鳴きして燕来てゐる軒明かり  
紫はははにつながらるサイネリア  
ゆく春の音なき雨のひと日かな

いのちまんまる

遠藤 真砂明

岩礁の百の海鳴り緑立つ  
いのちまんまる惜春の大入日  
病よき日や荒南風の海を見む  
甲板で割く昼飯の初鯉  
ひとりだけ泣いて来る子に風薫る  
逡巡は生きる足伽雲の峰

気まぐれ

宮内とし子

ジャズ流れ開き切つたるチューリップ  
霾や背より抜きて海老のわた  
牛の尾の動き気まぐれ花菜風  
春潮のはこぶ流れ藻うすみどり  
逃水の逃げることなき岬径  
放たれし鶏の高鳴き麦の秋

蛸 蛸 大畑善昭

平和とは蛸蛸のしづかにゐる時間  
憲法記念日あをぞらに一穢なく  
寺の木の高きを領し鴉の巢  
一つづつ揺れ熊谷草百を超す  
渋民の野に牛尾菜<sup>もおで</sup>など摘む遊び  
田を植ゑて水の光の美し村

片 陰 吉田陽代

見馴れたる木目天井明易し  
花菜畑まぶし眠りの浅き身に  
花弁散り今放心の牡丹蕊  
片陰の途切れていつそ小気味好し  
下闇の香や動物のごとき勘  
夏立つや縫子の腕の針坊主

かまど火 楠原幹子

ひばり東風対岸の上手眩しかり  
瀕死かもしれぬ地球や桃咲いて  
暮れなづむ空は水色つばくらめ  
離陸機をつぎつぎに呑み大霞  
古民家のかまど火に春惜しみけり  
逝く春の船が船曳き隅田川

春惜しむ 林昭太郎

鉄棒に身体を折りて春惜しむ  
牛鳴いて牛が応へて夕おぼろ  
春愁やシニアグラスと呼ぶ眼鏡  
校則に適ふ短髪風ひかる  
枇杷熟るる袋の中の明るさに  
ハモニカを吸へばラの音蝶生まる

聖母は永遠に 荒井千佐代

夕あかね潮に浸りし葦の角  
海風と川風出合ふ桜かな  
刃のやうなひかり端午の日の近し  
父の忌のすでに夕べや風の麦  
海底に日の斑の揺らぐ端午かな  
花ミモザ聖母は永遠に子を抱きて

始の火 菅谷たけし

春筍へ二度目の鍬はためらはず  
鳥の恋戸袋に闇詰まりをり  
春陰や荷風の路地の檜皮堀  
薔薇といふ活字笑つてゐたるなり  
五月来る風が折りたる子の尿  
万緑や切り火が人間の火の始め

持ち時間 甲州千草

嘶けよ 駆けよ 古代馬 若葉光  
 花海棠 耳裏熱く 人に会ふ  
 座椅子 くるりと 春愁の 持ち時間  
 姉のよな 振替休日 柚子の花  
 掃き下ろす 階段絮たんぽぽ 昇る  
 母の日や こんなに 呑んだのは だあれ  
 稚魚稚魚ら 北川 英子  
 踏切音 止みて すぐ 鳴る 夕薄暑  
 放流の 稚魚ら 着きし か 青葉潮  
 きらめきて 影置き 去りに 巢立鳥  
 天蚕や 神の 托卵か と思ふ  
 桐の花 祖母と 母経し 手織絹  
 宇宙士の 過酷な 帰還虹 立つも  
 風青風青き 国 田所 節子  
 かまど 守る 遅日の 椅子に 棧俵  
 聖五月すこやかに 身を 血のめぐり  
 滝行者 ほのぼの 命火 照りをり  
 職立ち 駿河は 風の 青き 国  
 若葉光 点字 添へ ある 化石の 碑  
 紙本旅館に そろば んで 涼しき ものの ありし 旅

七曜 千田 敬

花は葉に 目立たぬ 並木径となり  
 七曜の 入れ替へ 自由麦の 秋  
 青葉潮 海石に 旅の 青を 解く  
 一幅の 幽霊 拜す 正坐なり  
 肉の 君われ 骨の ひと 夏は 来ぬ  
 海は 詩 兎波とも ヨットとも  
 氣遣氣遣ひ 久染 康子  
 瀧壺の 水 ごとんと 入れ替はる  
 太田山は 房総の 臍 朴 咲けり  
 運針の やうな 植田や 内房線  
 雨粒の 重さ 諾ふ 花 菖蒲  
 掃き 寄せに 重石の ごとく 墓  
 見舞はぬ といふ 氣遣ひに 風薫る  
 燻燻し 香 高橋 あさの  
 赤城嶺を しかと 据ゑたる 穂 麦風  
 古民家の 燻し 香を きく 今日 穀雨  
 梅は 実に ふところ 深き 旧家 かな  
 黒塀や 一隅 蟻の 住む ところ  
 漫然と 雲を 遊ばせ 水張 田  
 遠くより 水田 暮れゆく 桐の花

歌 声 頓所友枝

牡丹に午後の日射しは重たくて  
青空に素振りの声と鯉幟  
花楓緻密の文字は謎めきて  
歌声はきつとソプラノチューリップ  
行く春を追うてみちのく俄旅  
青田原ここより日本始まり

桐下駄 渡部節郎

棚田張る山葵田からの貰ひ水  
蛙鳴く棚田一枚縄張りに  
ふるさとの面影ふつと代田かな  
些事ひとつつこなして暮の春  
ひるがへるあそびをおぼえつばくらめ  
柁目なる桐下駄おろす夏はじめ

九輪草 鈴木良戈

夏蝶や波郷旧居へ石しるべ  
初夏や光の帯の小名木川  
風も陽も透る庭先九輪草  
夏潮の寄す閨門の屹立す  
舳先の灯包み五月雨しきりなる  
惜春や幾人送る俳句の師

うりずん 上谷昌憲

うりずんや水槽に止つ甚兵衛鮫  
水槽に魚影の秩序夏に入る  
夏きざす巨大マンタの腹仰ぎ  
アーケードに雨脚見ゆる立夏かな  
交番に稽古着干され椎の花  
海賊の末裔の島こひのぼり

一番糶 河口仁志

蝌蚪群れて田ごと田ごとの泥けむり  
逃げ水を追うて遠くに来てしまふ  
路地に舞ふ白紙一枚春あらし  
子供の日老人力を發揮して  
銀鱗の一番糶や初かつを  
子にもある譲れぬ主張麦青む

緑 風 淵上千津

櫛目たつ髪ひと結び早苗どき  
億劫なこと殖え桜薬からぶ  
老いの身も緑風緑雨思惟尽きず  
おもかげは天瑞の花朴咲けり  
墓碑銘めく復元文書青がすみ  
新調の骨盤ベルト走り梅雨

# 潮鳴集

約 束 菊 地 光 子

惜春の風を通して四つ目垣  
約束ごとありての自由石鱗玉  
蝶の昼サンドイッチの三角形  
離れ家へつづく飛石著莪の花  
初夏やテグスにつなぐとんぼ玉

下 男 部 屋 井 原 美 鳥

書き出しのインクの掠れ養花天  
残桜やかまどへ五歩の下男部屋  
颯々と山河ながして車窓夏  
じやがいもの花バス停のあるばかり  
麦の秋大きなものを洗ひけり

正 装 清 水 佑 実 子

菜の花や埴輪の口の動きさう  
括らるる団塊世代葱坊主



野馬捕りのなごりの土手やしどみ咲く  
大利根や今正装の水張田  
田植機の神事のやうな歩みかな

鳴り出でよ 荒井千瑳子

鳥帰るいつより「紙の本」てふ語  
鳴り出でよ春のかたみに金の鈴  
空映す代田上総の国拡げ  
赤信号抜けて目まとひ抜けられず  
万緑や窓一枚の画布となり

ほ ろ と 柴 原 公 子

夏に入る深井戸に声こだまして  
どの道をゆくも明るき夏はじめ  
山独活にほるとひそみし悔いの味  
約束のごと庭染むる諸葛菜  
藤房の降りこぼしたる昨夜の雨



# 沖作品



# 能村研三選

ふらここの揺らせばゆれて遠き日々  
つばくらめ影と一緒に宙返り  
新しき名札光りて花むしろ  
通りやんせ桜しべ踏む一年生  
春愁のエアポケットにあるやうな  
沈丁や水木邸への角いくつ  
くさぐさの白き苗札垣に添ふ  
葎の花閉づる門扉のあはひより  
豆の飯普通てふ日を安堵して  
新幹線夏を迎へに走り出す  
大樟の根のしたたかに若葉騒  
尾根分かつ緑の襲新茶祭  
風光り呼吸はじむるガレの杯  
腕に抱く遣作となりし春シヨール  
みどりの日竿に艶増す染めの糸

市川市

荒木 澤子

神奈川県

秋山ユキ子

和歌山

吉武 美子

秒針を命の音と聞く臍  
三月や会ふも別れも手を握り  
頃合を見計るやうに花吹雪  
駒止めの石に窪みや春落葉  
たんぼぼや空は朝から上ぎげん  
世の憂さをすんと落し春の月  
海の音掌で聞く桜貝  
行春や大きくうねるシンフォニー  
はやすでに空を奪へる若葉かな  
列島にドミノのごとく花便り  
初蝶の風に押さるる絹の翅  
春の川太き流れにひかり乗せ  
啓蟄や新調リユツクの萌黄色  
羊の毛刈る一気呵成の鉄技  
ひじき煮てふくふく揺らぐ落し蓋

市川市

小川 流子

熊本

石橋みどり

市川市

本池美佐子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

春愁のエアポケットにあるやうな 荒木 澤子

作者は千田百里さん指導の四葩の会に所属され、最近是我的指導する本行徳公民館の句会にもお見えになる熱心な方だ。年齢のことを言うと大変失礼だが、八十を越えているように思えるが作句の心は若く、句稿を見てびつくりすることがある。春愁とは風流味もある季語だが、なかなか厄介な感覚にも通じている。歳時記によれば、春愁とは「春のそこはかどない哀愁、ものうい気分をいう。春は人の心が華やかに浮き立つが、反面ふつと悲しみに襲われることがある」。このふつと「そこはかどない哀愁」にとらわれることこそが、エアポケットに入りこんでしまう時なのかもしれない。昼から夜に変わる狭間で日常から非日常へ逢魔ヶ時、この時こそが一番魔にたぶらかされる時間、つまりそんな時エアポケットのようなものに落ち込

むのかもしれない。

新幹線 夏を迎へに走り出す 秋山ユキ子

秋山さんは神奈川支部に所属される方、最近熱心に中央の例会などにも投句されている。現在、日本の主要都市へは新幹線網が整備され、来年は金沢まで北陸新幹線が開通する。駅のホームを滑り出すように出発していく新幹線、乗り込む客は様々で、時が勝負のビジネスマン、田舎の親戚や知人などの冠婚葬祭や病氣見舞い、そして、旅を楽しむ旅行客など。しかし、作者は大胆にも中七で「夏を迎へに」というように新幹線を擬人化した詠み方が面白い。新幹線の旅がいつの間にか膨らんできて楽しくなる。

尾根分かつ緑の襲 新茶祭 吉武 美子

新茶祭は熊野本宮で行われる行事で、お茶づくりの発展を願う行事。大社のそばにある茶畑では、巫女と地元的女性とで四、五センチに成長したみずみずしい茶葉を丁寧に摘み取り、新茶はその後、神前に供えられる。音無茶は養生の仙薬、人倫延齢に妙薬として平安の熊野御幸に殿上人がこの音無の里に茶を植樹したのが始まりとされている。熊野本宮の周辺の山々も新緑が美しい頃。尾根を分ける緑が濃く淡く襲っていた。

(以下略)